



石巻西高実況中継

～学校の情報や生徒の様子をリアルタイムで家庭に届けます～

平成28年9月16日 第31号

発行者： 校長 伊藤 俊

● 「全国高等学校ビブリオバトル 2016 東北大会」に出場しました！ ●

9月4日(日)、東北大学・カタールサイエンスキャンパスにて開館された「ビブリオバトル東北大会」に、本校3年生の小松結衣さんが出場してきました。「ビブリオバトル」は、公式ルールに基づき5分間で本を紹介し合う書評合戦のようなものです。この大会は、「活字文化推進会議」が主催するもので、文部科学省の「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本計画」において近年注目を集める取組みとして普及してきたものです。東北地方から11名の高校生が出場し、それぞれが思い入れのある本を持ち寄り、迫力ある弁舌でバトルを繰り広げました。

優勝者は、『帰ってきたヒトラー』ティム・ベルシュ著 森内薫訳（河出書房新社刊）を紹介した山形県の大変ユニークな男子生徒で、2017年1月8日(日)に東京で行われる決勝大会に出場することになっています。



《 本校出場生徒の感想 》

私は今回、ビブリオバトル大会に参加し、残念ながら予選敗退でしたが、とても有意義な経験ができました。最近、若者の活字離れが騒がれていますが、今、私たちに何ができるのか、様々なことを考えさせられた一日でした。

《 応援生徒の感想 》

◇私は、本を読むことは好きなのですが、自分の好むジャンルのものばかり読んでいました。今回、ビブリオバトルを見て聞いて「あ、こんなにも面白そうが本があるのか」と興味がかきたてられて、とてもよい経験となりました。紹介された本を機会があれば是非とも読みたいと思うのと同時に、来年は、自分も参加してみたいと思いました。また、大会に参加していた方々は、話し方からどなたも個性的で言葉が巧みでしたので、自分も語彙の幅を増やしたいと思いました。（2年 熱海 香鈴）

◇今まで、学校のビブリオバトルしか見たことがなく、東北大会という規模の大きな大会はとても新鮮でした。発表者の方々は、みんな個性的で、言葉で人の心をつかんでいてすごいなと思いました。それに、本の魅力もしっかり伝わってきました。このような貴重な体験ができてよかったです。（2年 鈴木 璃子）

※裏面に小松さんの発表内容と、大会で紹介された本を案内しましたので、ご覧ください。



【「ビブリオバトル2016東北大会」発表内容】

3年 小松 結衣

◇紹介した本『浜村渚の計算ノート』 青柳碧人著（講談社刊）

皆さんは数学という教科が好きですか？数学といえば何やら難解な公式や方程式が大量にありますよね。因数分解、一次不等式、正弦定理、余弦定理などなど。一問解くために一ページ丸々方程式で埋まることもある学生泣かせの教科です。そこで数学が苦手な人、数学に泣かされたことがある人、そして数学をもっと好きになりたい人におすすめしたいのがこの「青柳碧人」さんが書いた『浜村渚の計算ノート』という本です。

私とこの本の出会いは学校の図書室。受験生だが勉強したくない私は、どうにかして楽に頭良くなれないかなと考えていました。そんな時に出会ったのがこの本！読む前は表紙に書かれている浜村渚であろう少女と一緒に数学について学ぶ本だと思っていました。そんな軽い気持ちで裏のあらすじを読んでもみると、「テロ」「殺人」「加害者」、・・・なんて物騒な文字でしょう。最後の一行には「現代数学ミステリー」と書かれてあり、大のミステリー好きである私は、静かにこの本を抱きしめました。ちなみにこの時点で私の頭から「受験勉強」の四文字は消えています。

まず、この本のあらすじについて説明したいと思います。とある心理学者は言いました。

「少年犯罪増加の理由は義務教育にある！」と。

文部科学省はこれを受け、「心を伸ばす教科」道徳や音楽などの科目に比重を置き、反対に理系科目は「物事を数値化し、事実だけを重んじるのは、心を尊重し他人をいつくしむ人間性を否定しうる」として、もはや科目とすら呼べない状況におかれてしまいます。

そんな中、インターネットのフリー動画サイトにとある声明が流れました。

「私は、義務教育における数学の地位を向上させることを要求する。そのため、日本国民全員を人質にすることにした。」

それは日本を代表する数学者・高木源一郎、のちに「黒い三角定規」と呼ばれるテロ組織の指導者から、全国民にあてたテロ予告でした。実は彼の手掛けていた数学教育ソフトには催眠が仕込まれており、それを一度でも見たことのある人間は同様の確率で殺人を犯す可能性があるというもの。警視庁は即座に対策本部を設立しましたが、何しろ一度でもそれを見た人は何時催眠が作動するかわからないため、集まったのは数学音痴ばかり。そこに「救世主」として現れたのが、見た目は平凡な中学生、中身は数学が大得意な「浜村渚」という少女でした。

そして、長野県茅倉市。第一の殺人事件が起きました。

これがこの本のあらすじかつ、ユニークな世界観です。テロ組織VS中学生。普通なら勝負になりません。この作品の面白い点はそこで、浜村渚はテロ組織に「数学」で立ち向かうんです。決してコンパスで目つぶしなどはしません。安心してください。

この話は、一介の警察官である「武藤龍之介」の視点で進んでいきます。黒の三角定規が数学に関した事件を起こし、それを浜村渚が数学があまり得意ではない武藤に分かりやすく説明しながら事件を解決していくので、たとえ数学が苦手な読者でも楽しみながら読むことができます。

ここで皆さんに質問があります。分厚い参考書を見て、一から公式を覚えるか。それとも、この一冊の小説を読んで楽しみながら公式を覚えるか。皆さんならどちらを選びますか？

私はこの本を読んで、こんな方法でも数学を学べるのだと気づかされました。小説は好きだが、数学は苦手。合わせればお菓飲めたね的な感じで数学を学ぶことができる。まさに一石二鳥です。

みなさん、円周率は3.14まででいいので、代わりにこの本のタイトルと、受験勉強という文字だけは覚えておいてください。・・・忘れたらきっと後悔するので。

以上で本の紹介を終わります。ご清聴ありがとうございました。

◀その他の出場者が紹介した本▶ ※本校図書館にて所蔵していますので、是非読んでみてください。

書名	著者名	出版社	書名	著者名	出版社
まちがったっていいじゃないか	森 毅	筑摩書房	ない世界	江口宏志	木楽舎
オール1の落ちこぼれ、教師になる	宮本延春	角川書店	発達障害に気づかない大人たち	星野仁彦	祥伝社
キラキラネームの大研究	伊東ひとみ	新潮社	おちくぼ物語	田辺聖子	文藝春秋
粘菌～偉大なる単細胞が人類を救う	中垣俊之	文藝春秋	ハリ・ポッターシリーズ	J・K・ローリング	静山社